

日本人の学生がこれらの課程に編入する場合、学部にて在学している人は第一期に、学士号を持っている人は第二期の修士課程へ、修士号を持っている人は第三期のD.E.A課程へと編入できる。日本の学士号・修士号がフランスのそれらに相当すると見なされている訳である。

次に授業料であるが、教育の機会均等の精神が徹底しているせいか、驚くほど安い。ちなみに1987-88年の場合、年間510Fであった。日本円に換算すれば14,000円くらいであろうか。学生登録は一年ごとに行われる(日本の場合入学時のみであるが)。それは、大学本部への登録(inscription administrative)と教育研究系への登録(inscription pédagogique)の2段階に分かれており、どちらかを忘れてしまうと完全な登録とならないので注意しなければならない。

私の場合、第2期の修士課程に在籍していたが、2週間に一回の講義しかなかったので、語学講座にも出席していた。やはり外国人の学生の場合、一年目は大学の講義を聴き取るだけで精一杯で、ノートをとるような余裕はまったくない。語学力の向上のためにも並行して語学学校へ行くことをお勧めする。

フランスでの留学体験を今あらためてふり返ると、大学における指導もさることながら、最も自分を導いてくれたのは、指導教官も含めたあらゆる人々との出会いであった。誰とでも常に親密になれる訳ではないが、見知らぬ者同士でも気軽に言葉を交わせるのがフランスであり、出会いの機会も当然のことながら増えてくる。日本の場合、集団により個人のあり方が規定されるが、フランスはまったくその逆である。自分がいかに受動的な人間であるか、「生きる」ということをいかに軽く考えていたかということを感じた。フランス革命史研究を志す私にとって、対象とする地域の空気を五感で感じ取れた貴重な経験であった。パリに住んでいてこの地で革命が起こったことをなかなか感じ取れないでいたのだが、'86年の大規模な学生運動に遭遇して大いに想像力をかきたてられた。それは抗議であるとともに、「祭り」のようにも見えた。ある者は音楽にあわせて踊りながら、またある者は歌いながら行進していた。普段のとりすましたパリは豹変していたのである。今、目を閉じるとすぐにパリの街へ行くことができる。あらためて、私をはぐくんでくれたフランスに心からありがとうを言いたい。

西ドイツにおける店員と客の関係

——チュービンゲンのあるレストランで見た一件から——

文学部学生 高橋 完治

1988年の秋から翌年の夏にかけて、僕は西ドイツのチュービンゲン大学に留学した。留学中の冬は幸いに前年に引き続いて暖冬で、外出する際には、セーターの上に革ジャンをはおる程度でよかった。そんな暖冬のある日、ぶらりと出かけた折に教会の近くのレストランに入った。このレストランは数階建の建物の2階にあるのだが、建物の片側が坂道の中腹に面しているため、

坂道に立って見れば、レストランが1階にある格好になる。そして坂道に面した入口から店に入り、店内を横切って向かい側の窓辺に立って外を見ると、景色は2階から見えるそれだから、初めてこの店に入った客はいささか驚く。窓の下には市の立つ広場(Marktplatz)があり、休日には肉やハム、ソーセージ、野菜などの市で賑わう。広場を挟んで向かい側には市庁舎が立っている。日

本と違って近代的な建物ではなく、時代を感じさせる。正面の壁の上方には美しい人物画が描かれてあるが、残念なことに、誰がやったのか、黄緑色のペンキで汚されている。

店に入ると、中程のテーブルについた。馴染みのウェイトレスが近づいて来て「グリュース・ゴット(南ドイツの挨拶)」と言い、メニューを置いて行った。日本と違っておしほりもお冷やも出ない。おしほりが出ないのは湿気の少ない国だからであり、お冷やが出ないのはドイツ人が普段、水を飲まないからである。飲みたい場合は炭酸入りのミネラル・ウォーターを注文する。

メニューを開いた。ドイツの料理はまずいので有名である。ただし、ソーセージ料理とシュヴァイネシュニッツェル(トンカツの一種でトンカツよりも大きい)は例外で、結構うまい。この日はシュヴァイネシュニッツェルを食べることにした。

注文後しばらくしてから運ばれたシュヴァイネシュニッツェルを機嫌よく食べていると、みすばらしい格好をした老婆が店に入ってきた。結った髪は半ばほどけ、不安そうな表情で店内を見回している。テーブルにつくの躊躇しているのか、出入り口辺りをおぼつかない足取りでうろろし始めた。店内には割合身なりのいい客ばかりいたから、老婆は場違いな客に映った。老婆のもとへ先ほど僕に給仕をしたウェイトレスが近寄った。彼女は老婆の手を取り、両手で包み込んだ。そしていたわるような口調で語りかけた。老婆の顔に安堵の色が浮かんだ。ウェイトレスは老婆を近くのテーブルへ導いた。席についた老婆にメニューを開いて示し、ぎこちなくページをめくる老婆の顔を優しい表情で見つめた。

店を出た後、辺りをぶらついた。みすばらしい異国の男がギターを鳴らしながら歌っていた。足元には使い古してよれよれになった浅い箱型の鞆が口を開いて置かれ、コインが数枚、投げ込まれていた。

少し離れた所からこの貧しい男を眺めながら、先ほどの老婆とウェイトレスの事を考え

た。ウェイトレスはみすばらしい身なりの老婆の手を包み込み、優しく迎え入れた。日本だったらどうだったろう。手を取る、取らないはドイツ人と日本人のスキンシップの度合いの違いから問題外としても、日本のウェイトレスやウェイターだったら、みすばらしい客に対して、あのウェイトレスのように優しい態度を取っただろうか。冷たく一瞥するだけか、せいぜいのところ、形式的に「いらっしゃいませ」と声を掛け、事務的な態度で給仕し、後はできるだけ構わないようにし、ささと食事を済ませて店から出て行ってくれることを内心願うであろう。

無論、西ドイツのウェイトレスやウェイターが客に対して常に心優しい態度を取るのではない。大抵の場合、ドイツ人は客をあまり丁寧には扱わない。恭しく客に仕えるなど決してしない。商売人は腰が低ければ低いほど良いという日本式の考え方は西ドイツにはない。店員も客も対等な位置関係にある。店に入った客に店員が「グリュース・ゴット」あるいは「ゲーテン・ターク(今日は)」と声をかければ、客も同様に挨拶する。客が店を出るとき店員が「アウフ・ヴィーダーゼー(さようなら)」と言えば、客も同じことを店員に向かって言う。かなり形式化したやり取りではあるが、客が黙って踏ん返り返ってはいならぬということがしつかりとした土台になっている。仮に日本のように客が無言のままにいたらどうなるか、ということを知り合いのドイツ人女性に訊いてみたことがあった。店員はムッとした表情になるということだった。

一個の人間と一個の人間が面と向かってやり取りをするといった店員と客との関係は、時として、日本人にとって不愉快な事を惹き起こすことがある。ある日本人女性がドイツでの生活をつづった書の中に次のような話がある。ある時、彼女はデパートの帽子売場で婦人用の帽子を買った。その後、洋服売場でスーツを買ったが、スーツの色と先ほど買った帽子の色とが合わない。帽子売場へ戻り、

買った帽子を包み袋から取り出して、他の帽子と見比べた。いろいろ迷った揚げ句、結局、交換はやめて、買った帽子を再び包み袋に戻した。そこへ帽子を買った時とは別の店員が近付き、彼女の腕を取って「コム（来い）！コム！」と引っ張った。万引きと間違われたのである。彼女は驚いたが、できるだけ心を落ち着けて事情を話した。しかし店員は頑として聞かず、「コム！コム！」と腕を引っ張る。意を決した彼女は帽子を買った時のレシートを示しながら喧嘩腰で徹底的に事情を説明した。すると頑固な店員もやっと分かったらしく、「オーケー」と言って彼女を解放した。勘違いをして客に迷惑をかけておきながら、一切謝らず、「オーケー」の一言だけである。

似たようなことは僕も経験した。近所のスーパーへ買い物に行った時のことである。朝食の惣菜をカゴに入れてレジに並んだ。レジスターのキーを叩く髭面の店員の素振りが気になった。何かに気を取られている様子だった。支払いを済ませた後、気になって釣りを確かめた。足りない。1マルク足りなかった。たいした額ではなかったが、ごまかされたのはこれで2度目だった。振り向いてレジを見ると、髭面の店員はおらず、代わりに背の高い男が次の客の勘定を始めていた。その男に声を掛けると、男は「今、他の客をやっているから後にしてくれ」と言った。レジに並んでいる客の列は長かった。半ばどうでもよくなり、釣りの足りないまま店を出ようとした。すると背後から男が「ヘイ！」と叫んだ。振り向くと、険しい目つきでこちらを睨んでいる。万引きに間違えられたとすぐに分かった。西ドイツのスーパーでは、客が備え付けのカゴに商品を入れてレジに並ぶのが普通だが、中には自前の袋に商品を入れてレジに並ぶ客もいる。男は僕を後者と見なし、未支払いの商品を自前の袋に入れたまま外に出ようとした客だと思ったのだ。レジに並んだ客の視線を感じた。こちらに非はないが、このまま男を無視して店を出る訳にもいかな

かった。レジに戻り、男にレシートを示しながら釣りの足りないことを説明した。男はレジを離れ、先程の髭面の男のもとへ行き、二言三言、言葉を交わした後、戻って来て、レジから1マルク取り出して黙って僕に渡した。男は一言も謝らなかった。客を万引き扱いし、それが間違いだと分かった場合、日本なら店員は平謝りする。だからドイツで上のような目に遭った時、日本人はひどく不愉快な気分になる。日本でなら店員はこうする、ああする、としきりに日本の店員の態度を懐かしがることになる。

しかしながら、店員と客が対等な位置におらず、店員が客に対してへりくだった態度を取る日本の店員と客の関係が優れたものとは思えない。確かに日本で客を演じるのは気分がいい。「いらっしゃいませ」と声を掛ける店員を一切無視して悠然と店内を回り、支払いを済ませれば、「ありがとうございました」と声を掛ける店員をこれまた無視して出て行く。スーパーにしろ、デパートにしろ、レストランにしろ、床にごみを捨ててもとがめられず、店員とぶつかっても必ず店員の方が先に謝ってくれる。このことをあるドイツ人に話したら、日本では客はケーニッヒ（王様）だ、と驚嘆していた。

だが、日本における王様と召使いの関係は皮相なものに過ぎない。「いらっしゃいませ」も「ありがとうございました」も完全に形骸化した言葉であり、店員は客を王どころか人間以下と見なす場合すらある。先日、テレビでカード社会を風刺するドラマを観た。その中で、顧客を人間ではなく数字と思え、というセリフが吐かれる場面があった。日本における店員と客の関係を象徴する言葉である。客は王の座を与えられてはいるが、実質的には金を支払う存在でしかなく、人間ですらない。このことの極端な形での現れが次の事実であろう。あるファミリーレストランの店長は、気にいらぬ客だと、厨房でその客の料理に唾を吐き掛けてから配膳する。また、あるファースト・フードの店では、下に落ちた

フライドチキンが平気で売られる。店員のこういった態度に拍車をかけるのが、王になりきった客の傲慢な態度である。おれは客だ、丁重に扱え、という意識が程度の差こそあれ、大抵の日本人にはある。あるビデオショップでは、固室でポルノビデオを観た後、テレビ画面に精液をぶちまけたまま帰る客が頻繁にある。画面にねっとり付いた精液を店員が後始末するのである。客の振る舞いが尊大であればあるほど、客に対して店員が抱く嫌悪感が高められ、その結果、店員は先に挙げたファミリーレストランの店長のような行為に奔る。店員は客の目の前では深々と頭を垂れ、背後からは鼻糞を投げ付けるような真似をし、客は張りぼての王座に気持ち良く身を沈め、横柄な態度を取る。これが日本における店員と客の関係の実質だろう。こういった関係の中から、あのウェイトレスが老婆に示したような偽りのない心優しい態度が生まれるだろうか。店員と客が同等の

位置に立ち、面と向かい合い、偽りの王も、偽りの召使いも演じることのない西ドイツの社会において、確かに日本人は不愉快な目に遭うことがある。だが、店員と客の関係の基盤が対等関係であるがために、客の尊大な態度の行き過ぎも、店員の媚びへつらう態度の形骸化も抑制され得るのである。すなわち、両者が互いに相手を自分と同じ人間として、必要以上に敬わず、必要以上に見下さないがゆえに、ごく当たり前の人間関係を結ぶことができるのである。そして正常な人間関係が保たれているがゆえに、時として、あのウェイトレスがみずほらしい老婆に対して示じたような心優しい態度が生まれ得るのである。ウェイトレスと老婆の一件を見た時から、僕が日本人としてドイツ人の店員に対して抱いていた不満は消えていった。そして、あのウェイトレスと老婆との間に咲いた美しい花が、いつか自分とどこかの店員との間にも咲くことを期待するようになった。

台所の貼紙

文学研究科学生 前野弘志

留学生活を楽しくするのに欠かせないもの、それは何と言ってもゆかいな友達だ。留学期間を終えてチュービンゲンを立つ前の晩、寮の同じ階に住んでいた連中が、俺のために集まってくれた。場所はもちろん俺達の台所。広さは10畳ほど。バルコニーからはチュービンゲンが一望できる。始めはおとなしかったが、興が乗ってくると、歌が飛び出す。踊りが飛び出す。あげくには、大道芸までやる奴が出る。3本のこん棒に火をつけて、お手玉するのだ。さすがに本人の顔もひきつっていた。みんなは俺に何か日本の歌を歌えと言う。それで、うーん、と考えた末、「ワインレッドの心」を歌うこ

とにした。もう一年も歌ってなかったので、歌詞を忘れてたり、1番と2番がゴチャゴチャになったりしたが、こいつらには分かりっこない。次の日、ちゃんと飛行機に乗れるかどうか心配だった。こんな楽しいさよならパーティーをプレゼントしてくれた寮の友人達も、実を言えば、帰国する最後の1か月ほど前までは、廊下で会って「ハロ」と声を掛ける程度で、そんなに親しい仲ではなかった。そんな連中とこんなに親しくなれたのは、ある一連の事件のおかげだった。最初は卵だった。冷蔵庫に入れておいた茶色い卵が、いつのまにか全部白卵になってい